諸十家類題集

俳諧十家類影集冬之部

○月部

十月　立冬　初冬　小春　神無月　玄猪

達摩忌一　陰金講　十夜　陰取戒　戎講　失念會

爐　爐開二　口切　ふいろ　火燵　埋火

火桶三　火鉢　炉開　冬の衣　初時雨四　時雨五

初霜　霜　霜解　冬砧　落葉六　木の葉

風九　冬木立　枯木　冬枯　枇杷の巻　帰り巻

山茶花　茶花十　枯屋巻　枯野　冬野　冬菜

冬川　冬の月　冬の菜十一　石蕗花　大根引　冬菜

韮漬　蕎引　麦蕎　風呂吹　蕎汁　納豆
納豆汁十三　初雪十三　薄氷　初氷　冬月　凍む
納代寺十四　納代　千鳥十五　鷗　水鳥
鴨　みそたく十六　鶏　鶏　炬燵　冬蝿　十月蚕
蟹　海亀　鰤汁十七　鱈　鰤　藻魚十八
炭竈　炭焼　炭　炭取　炭賣　炭俵
摘物　ぬかん　炬燵　十九　帝衾　帝子
頭巾二十　履成鼎　足袋　冬籠　冬籠　暦賣
霜月　袴　冬至　室の梅　冬の梅　梅見也
神楽廿一　星神楽　陽火燵　紙帽廿三　雪　雪丸十四
雪やけ　雪吹　雪　廿七　玉霰　霰　氷柱

雪の水　氷　廿八　凍　雪　仙蕎　蕎
鷹　鷹狩　雪搔　暖　鰊　杜父魚
煮凍　生姜味噌廿九　喬麦湯　薬喰　十二月　早梅
雪　梅　冬　椿　臘八　雪
雪　雪　雪月　雪　雪念仏三十　仏名会
鄭　仮　炬　仏　乾鮭　生鮭廿六
節季借　古暦　煤掃廿七　餅搗　餅　花廿八
年内の春　さこね　ちゝ　松　年越　節分　晩冬
年の市廿九　歳暮　年積る　年浪
年の漁　年の夕　年の尾　年の内　流る年　閏月
年木樵卅　衣配　年の宴　年守　年取　年の雛
年忘　年の暮卅一　老の寿　行年卅二　年を忘る　王子稲

大三十日　大晦日

俳諧十家類題集冬之部目録終

俳諧十家類題集冬之部

八千坊　輯校

〇十月

立冬　[illegible]　沾徳

初冬　[illegible]　其角

小春　[illegible]　蕪村

神無月　[illegible]　言水

[illegible]　蕪村

[illegible]　言水

[illegible]

弁当月明くして花を生んでいとゝ　其角
うぶ毛や紙屋の灰治の弁当、
陸奥の国に居よりうり弁当、
卯塔の寒衣やきるも弁当、
嫦娥命ぢきてうらん弁当　来山
宗伝よりも仙人をまこうるはよ　蕪村
雲猪とゆ紙屋のうらに枝折荻　其角
三日月のふくらさほとよ雲猪、
あるものの下敷もたらんこゝ枝くる、
達摩忌
きて〻うゆ茶釜のうらんも新ちり　帝因

玄猪

御命講

十夜

御取越

恵比須講

きて〻うゆ捕るにさるる蠅のはし　麦林
陸命講ゆ油のゆうる酒入弁　芭蕉
菓子ゆ紙ちうはしをうり陸命講、
十夜弁明るの納をたをきをう　言水
ものをたくうく寝む十夜ゆる　帝因
紙文をくの寒うるゆを十夜ゆる　麦林
あるをうゆ心ををもをうを十夜弁　蕪村
ものゆをうを陸をうゆ陸をこし　芭蕉
振ううの居ちをれうるひす講、
ゆうを振をり小者振をり麦講　其角

福天の庶机のもとに仕切帳　其角
ふるさと衣裳祝いはひなり　夷籠
腹籠山中ふるさと酒の戒こう
保氏ゆかしき春の乳乃夷こう

夷食賣

糧う賦を流ふるさと夷食賣
炉よ炉てきつりを拾る夷家　石三水
炉和ふ伊ふとこふふと金のこう　蕉村
炉ひふふとの日を去れ　みの去来　其角
炉ひふふと雪中庵の家の酒　嵐雪
蕉村

炉開

爐

口切

ふふふふる蛭の庵をなろこう　芭蕉
茶の湯ふふふふふふふ瓢汁　其角
口切やふふふふふ猿蓑　、
ふふふふ小淵下ふふふふ　蕉村
口切やふ山元ふんとふの名きて　、
ほいろ

火燵

ほひふふふふふ稲　我住ふいろふ　其角
住ふこふ蛭のふふ我やふふふ　芭蕉
ふ燵こふふ青柳の湯を捨ふふ　其角
火燵のふふふね夢ふき葉を捨ふ　、
雑用ふ内く猿ふる火燵こふ　希因

埋火　希因

火桶　来山

蕪村

其角

冬三

火鉢　来山

夜半冬　蕪村

冬の夜　芭蕉

初時雨　其角

言水

三月の雲のように初しぐれ　希因

桐の実の吹まくて初しぐれ　麦村

蓮葉の濁をうくん初しぐれ　蕪村

赤い実の行く秋の初時雨　希因

偽をうくる色の行や初時雨　蕪村

忘しぐれ雲も行や初時雨　希因

みのむしの泣かしに初時雨　蕪村

初しぐれ肩を焉帽子の雫うる　希因

あひの山をさそふや初しぐれ　希因

冬

時雨

時雨する蕎麦畑うまし初時雨　芭蕉

一尾釣ハしらまの雲ふる大雲　言水

傘持て雲ぬる村しぐれ　素堂

天の原よりの原不二の中行時雨哉

旅の旅住の所の宗祇の時雨哉

硯さへ乾くいとまもなし初しぐれ　其角

約柿の夕日そこうるふしぐれ

時雨る平蕪基の岸柳

むら時雨る偏の道反路ねり

いまをさへ時雨来る夜の纔付色
其角

義をたてゝ道に迷はゞ夕時雨、
蹈されし浜の日かけりやむら時雨、
八重がきの楠の板子をたゝく時雨、
蝙蝠や柱を捨る一しぐれ、
時雨来る渡る松の物干うつなり、
今熊野きくしぐれに行しかし、
長信のそこらに鬼をえらぶしぐれかな、
馬たちてやまるし廁の一しぐれ、
三人の身を西汀のしぐれ哉、

夢よりもうつゝてぬ宗居ならし時雨、
飼猿の引窓にうかゞふしぐれかな、
鶏鳴の中より出るむし時雨、
小松しぐれ人をもたゞむ山居哉、
茶をのまぬ生米みさゝぬしぐれかな、
時雨くる酔やのとらへて 村霧、
松原のとこさるや残る時雨かな、
時むかて茶をすゝて急ぐしぐれかな、
寺山のふもとよりさ着しぐれかな、
あらしうき人をよびだす時雨かな、

深谷やしづまる時雨の音もなし　嵐雪
茶筅箕てしぐれあまさよさん　、
隣ひと川隔てきかむ時雨かな　希因
菜一把牛よりかせて時雨けれ　、
宿かりて名を名のらする時雨哉　芭蕉
しぐれふれ笠ぬく霜月ばかり　、
ふれてくれしの松も時雨けり　来山
化されて狐を化をしくれける　、
伏見まてゝ来る大坂の時雨哉　、
まつひとき見えぬ咲のしぐれ哉　、

干網りし入日深くしくれけり　、
又降るとこのうつひのしぐれ哉　、
むかし時雨されどもそのあとなし　、
岩のまひを食も出る皆時雨　、
愛そのなしくゝを研めしぐれけり　、
時雨るゝやしぐれの中乃一ヶ寺　麦林
茶焚てうらんまるきしくれける　、
夕時雨蟇ひそみ音に愁ふ哉　蕪村
しくるゝや我も古人の夜に似たる　、
古傘の婆娑と月夜のしぐれかな　、

初霜

霜

志くるゝや我も古人の夜に似たる　蕪村

志くるゝや鼠のわたる琴の上　、

楠の根を静にぬらすしくれ哉　、

初霜に何とおよるそ舟の中　其角

霜[illegible]鳶の[illegible]のくり哉　言水

芭蕉いつれ根笹に霜の花さかり　素堂

金蔵の[illegible]霜の声　其角

[illegible]蜂の大洞[illegible]霜の声　、

栗飯の焦[illegible]や霜の[illegible]　、

山犬を[illegible]霜夜の[illegible]　、

[illegible]や[illegible]　、

淋しさにふとん[illegible]霜の色　、

[illegible]に隠者[illegible]しと　、

石菖の[illegible]霜　、

蝶の[illegible]や霜の菊　、

霜解

[illegible]あり[illegible]の霜　蕪村

霜[illegible]や[illegible]下駄の[illegible]　治徳

冬砧

[illegible]や霜夜の[illegible]砧　芭蕉

打やむは[illegible]冬の砧の[illegible]　来山

落葉

留守のまにあれたる神の落葉哉　芭蕉

沾徳

素堂

来山

嵐雪

麦林

薫村

木の葉

希因

沾徳

言水

希因

其角

[illegible]ふ[illegible]る[illegible]や狐の尾　其角
[illegible]に梢の梅の[illegible]れ　嵐雪
木枯の[illegible]ふ[illegible]
[illegible]の[illegible]
風や[illegible]　麦林
[illegible]や行[illegible]る[illegible]　蕪村
[illegible]や[illegible]の[illegible]
木枯や岩[illegible]裂[illegible]
[illegible]に腮[illegible]や[illegible]の魚
[illegible]や[illegible]小石を[illegible]

[illegible]や留の小石見えし日[illegible]る　希因
[illegible]や[illegible]の車　其角
[illegible]
[illegible]
二村よ[illegible]一[illegible]　蕪村
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

冬木立

枯木

[illegible]枯木の夕[illegible]日　其角

冬枯

枯れ伏す藻の上に枯るる　芭蕉

枯れ枯れの蘆の霜降る　其角

枇杷苍

枯れ枯れの日蔭の日蔭　蕪村

冬苍

うらうら茶もせぬ茶もうらの夏　希因

うらうら茶もせぬ茶もうらの夏　切　其角

うらの板の月もうらうら　希因

行の木と写さまもみうら品　来山

山茶花

山茶花四時日の夕こう桃　言水

山茶花の蕾もうるる旅寝哉　沾徳

茶花

茶の茶や利休の宿るよしの山　素堂

茶の茶や古寺ふるるも茶もおぼるる　蕪村

茶の花や石を枕にして寝る

枯尾花

尾花葉もて仮寝の枕哉

枯野

枯野の撓ん和る枯野哉　沾徳

かすかなる枯野の石の苔のうれのこる　其角

笑ふ枯野こそ枯野哉　麦林

菊除して石の日の入枯野哉　蕪村

大とこの蕾ふるふ枯野哉

むさくひの小ふるふる枯野哉

[illegible] 蕪村
[illegible]
[illegible] 春医
冬型
[illegible] 其角
[illegible] 来山
冬景
[illegible]
冬川
冬川や [illegible] 其角
冬の日
[illegible] 沾徳
寒菜
[illegible] 麦林

[illegible] 来山
石蕗花
[illegible] 言水
[illegible] 蕪村
大根引
[illegible] 小坡 [illegible] 大根引 芭蕉
[illegible] 大根引 [illegible] 希肉
[illegible] 大根 嵐雪
[illegible] 大根引 麦林
冬菜
[illegible] 其角
[illegible] 我[illegible] 嵐雪
蕪菁
[illegible] 其角

麦蕎

麦蕎や一昨日又むかしの人　麦林

冬ごもりこの蕎麦屋居るうち　沾徳

麦蕎や百年生きて無ていうり　蕪村

風呂吹

日本の風呂吹は敵山　其角

蕪汁

蕎汁や蕎のうちもちもち新い又、

納豆

閑居の糠ふき落せる納豆哉、

納豆汁

沾徳ふくて又の寒さや納豆汁、

おほ〳〵寒さきめ神を納豆汁、

入さのようくもちもち納豆汁　蕪村

新蕎や家の掛金の納豆汁

初雪

初雪や樹〻うつりもる格のうち　芭蕉

初雪や多仏の寺のたもとも、

初雪や幸庵居りやうりいるれ、

初雪や蕎麦とりの機川　言水

初雪や絶の磬古る発る眠る　沾徳

初雪や花の枝枯の小七蕎　其角

初雪や牧やうふて寒ぬ佐

初雪ふまくもちもちの蕎の新、

初雪や茶ゐるるもちる朝飯、

初雪や門を捨ける夕ゆるくれ、

ちる雪や関はみさらうな人を待
ちる雪は人なき方の伏見舟、
ちる雪は妹か後を何処かな、
初雪や十まる子の海のうへ、
初雪や犬の庵には松の垣、
初雪をよそへくきなき哉、
ちる雪や猿くらし白丁花　嵐雪
初雪やしかよ山をかさぬる　希因
ちる雪や中を持らぬ萩からら　麦林
初雪の底を叩けば竹の月　蕪村

初霜や消ればぞ又草の露、　其角

薄氷

うすらひやわづかに咲る芹の花　其角

初氷

芹焼やすそ輪の田井の初氷　芭蕉

冬月

此木戸や鎖のさゝれて冬の月　其角
山鳥のねうぬる夜まで月寒し、
片よりていつれを替る池の月　来山
静なるかしの木はらや冬の月　蕪村

寒さ

塩鯛の歯ぐきも寒し魚の店　芭蕉
松ころを枕してや聞る寒さかな、
芽卿より出て見ふつる寒さかな、

我ものを指ものしてりをきこうれ　麦林
使衆物者使へるものさむさかな　其角
なるうのうの陳のうをきを中を山
弁を月ふるたの若をまりのをき
生きてをるる扉風のたるの生をる　希因
我落をを着上てをるををのる　来山
易あるを新をを流ををををる　蕪村
寺ををく擢をををを嵐をる
四ををむ嵐のおををむさをる
必の新中人をて清を胡牛生　言水

胡代寺

胡代寺大拙堂をとをををり　其角
ををを合をををををを胡代寺
胡代ををを新をを拙堂　麦林
新一つをを胡の新をを自れる　其角
閑の新中巣ををををを書　芭蕉
ひををるをよをむをを浦の秋湖
ををを毒を毒を蔵されて少をを新
揖をのををををををををを水　希因
秋浦原の毒　聖ををを新　其角
明を毒を毒新の梦新をを

胡代千鳥

村しくれその夜ハ宿し虎か伴　其角
凍鶴のさらに吹るゝも大刹鳴
今年や冬の中より酒になる、
寒日和月のかゝりきや村時雨、
堤檐寒や渡て見たる破なる、
沖の帆も十ばかりさらや浜千鳥、　希因
辛うじて船出を呼や川なる
笹舟の流をなして千鳥かな、　麦林
鳴来て網へはいる千鳥かな、
空の蔦の葉枕に鳴や村千鳥、

羽織着て綱もきく夜や河豚　蕪村
風雲の夜すがら月の千鳥哉、
加茂人の火を避るや小夜鵆
礒ちどり足をぬらして遊びけり
ありあけの波や千鳥の横ありき、

鷗
汐波の鴫首ならぶ彼のこぼめの礼　其角

水鳥
水鳥や百姓ながら弓矢取　蕪村
水鳥や舟に菜を洗ふ女有り、
水鳥や枯木の中に駕二挺、

鷲
念仏のむだ足なきにはなれ鷲　沾徳

滝口やおもひ捨てしも池の鴛 其角

十六て鴛に縁る〳〵行ける 、

鴛鴦の是〳〵ちらと落るかり 、

鴛の行ひつ付や山おろし 希因

里過て古江に鴛を見付たり 蕪村

鴨

落ま行を喰せしへまれのきを 嵐雪

絵鴨の春ゆく終る月かな 、

鴨ありて来まて思ふ影の夢 、

門ちる傍起つのある池の鴨 希因

みて浮く

行く水の流しやゝ乗かへひ 其角

本荒やし石合まさりかゝりみれ 、

鸕鷀

鵜籠や焼火に残る翔人かな 沾徳

寒かりし杉の掛菜をみてさらね 其角

夜興引

夜興引人犬やしをりて行 、

犬引て豆腐桶かゝり里夜興 、

夜興引や犬のとかむる塀の内 蕪村

冬蠅

憎まれてながらふる人冬の蠅 其角

十月蚤

かゝしく嵐の果まて明ぬ 嵐雪

折もしてゝみ湖の蚤のうとかり 素堂

蠣

蠣むきや家にいれてぬる〳〵笑 其角

海亂　嵐雪

海亂そこもむつかしや独住

海亂冷えいとうるいとのうお信濃

飯汁　希因

ほの浦くくけて海牛亂邪

本のもくらやうよ寄りくと生海亂　麦林

ひとくらくもなきのふいとときてくけ　芭蕉

世の中の舅をとうやぬくとけ　其角

生番をふくとうまりぬくと汁

人妻あるを大根ちうを能汁

鉄鉢のそくふとくくや飯とけ

飯汁ふうゝ本州の吸ふう郷

能ひとの世くくもるる胴引ふる

妻をくらぬ飯なうくくそて小夜

世紀の月飯ものひとの笠の雨

汁孫ひくふのふうやとの汁

飯てくうと飯ふとて雪の飯

結人ゆうせ杉の河孫とと

主殺切ていうくふう飯の　西

名をとくをてゆうやと飯とて　素堂

叢雲作のひと入ふうゝ河孫汁　希因

鱈
鰍鱇
藻魚

汁豚の面白きを人と白眼ぶ　蕪村
雪を世とつくるを侍よ鮟しる　〃
煙の家の呉人いまだし炭けり　〃
鳴くけの家居さて居る雉子哉　〃
鮟汁の有ありしかと撥しをり　〃
待宵て鮟答へてゐる門人よ　〃
雲うつて鮟よとのぶの友とうん　〃
鱈けをはいて歳よ高るなり侍　嵐雪
ひん鱇をふりさけてふれて厨哉　其角
何よきん藻うをとをふたる　〃

炭竈　炭竈やし終朱竈井の彩の松　其角
炭　〃　ちちちのやし物をぬをい猿の字　〃
炭焼　炭屋さのひとりてけん釜のうん　〃
炭　〃　ちの炭刷る火炭と斧の出る　〃
〃　〃　ひてもうかの一束とのね炭　〃
炭取　炭屋の伏こと火猫ひ盃ひ居る　佑徳
炭賣　炭うやし猫の活ち鼻をとる　蕪村
〃　〃　炭うよ猫をとるかう那　其角
炭俵　井の吸乃小庭ちく炭俵　蕪村
〃　〃　〃　〃　〃　其角

摘綿　其角
蒲團　嵐雪
いそぎ〳〵蒲團干さる須磨の家　蕪村
虎の尾を踏ばく袋ふくんかな
火鉢のこうの森あるもれむふくん
古雪ふる夜ぬるもふくん
夜着　来山
袷着物家毒家の徒とりむ
袷着物ふ法衣を天下の食とう非
食　嵐雪
かしく殺くやしうふくん
法師律師ふくりくとぬるる　蕪村

紙衾　言水
紙子　其角
よく〳〵寒さの寒さぬるもひとつ稿
寒さの寒さて法る物もる大井川
隨うふ寒さふいそん法師の冬
学〳〵せ〳〵意の意高や紙子の袂
紙子の号てくり法師ふいそん
寒字の字のもれ矢てうくうう
寒さるる寒さ居の寒やさ〳〵紙子　来山
寒〳〵物て寒さの破もふ法師　蕪村
法師や寒衣ふくとおひり

頭巾

先をあくまで長くなりたるを
茶宴又雪の袋也 投げ捨て
庵主のうつり舟の裏乃頭巾なる
乃うれなるを初めかぶりし投頭巾
朝嵐るの風てはりたるを
自ら手うを手ぬぐ頭巾の寝巻
世ら手を写ぬぐ丸頭巾
引うつて再をけうれむ頭巾なる
ちゝ空ちるの頭巾眉隠さて用ゐ
赤頭巾ちゝ世のさるまを御ちるる

蕪村
芭蕉
素堂
沾徳
其角
、
麦林
蕪村
、

ちゝ先ちゝ小ゝ頭巾ようなく頭巾、
用ちゝを用いて中頭巾小風呂敷、
頭巾ちゝて手ちゝりくの和漢頭巾、
赤ゝゝちゝ足袋おちゝちゝ母老人
足袋ちゝて手ちゝ頭巾ちゝ紙ちゝ
足袋ちゝて赤ちゝ手ちゝ女房也
羅紗洋中田埋ちゝちゝ義

言水
蕪村
嵐雪
芭蕉

後の母ちゝいうちゝるちゝんちゝちゝり、
金ちゝ体の手ちゝの書のちゝ中ちゝちゝ、
雑ちゝ乃名ちゝ後ちゝ乃ちゝ義

其角

足袋

冬籠

[illegible]　其角
[illegible]
[illegible]
[illegible]　希因
[illegible]
眼[illegible]　来山
[illegible]　麦林
[illegible]
居眠りて[illegible]　蕪村
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]　其角
冬搆
暦賣　[illegible]十月の暦売り　来山

○霜月

袴着　袴[illegible]の子[illegible]売り[illegible]　来山
冬至　[illegible]地を[illegible]人[illegible]　蕪村

室の梅

寒菊紀典主か園に梅の冬さかり　蕪村

内裏の古溝をわたるや室の梅　其角

冬の梅

ちるものゝ手つまをしき冬の梅　希因

冬の梅きのふやちりぬ石の上　蕪村

顔見世

顔みせや晩いさむ下部の橋　其角

顔見せや夜着をはなるゝ妹が許　蕪村

白かほや既うき世の飯時分　、

うらうらやしろくんをまくる東山　、

神楽

町神楽居家のひさしをまとふ道　其角

夜神楽や鼻いき白き面の内　、

かくし舟澪の竹の漁火白らけ　嵐雪

里神楽

湯に神楽の袖をぬらしけるへ　来山

それとたゞ緑袖きんて里神楽　其角

庭火焼

庭火焼や霧うるはしき京の面　蕪村

庭火焚や火も中くゞる細奥　、

鉢叩

長嘯の墓もめぐるか鉢たゝき　芭蕉

鉢たゝきさしもやうのあるる道　言水

鉢たゝき我殿の門を通るなり　来山

伴野継を呼ぬるやまとの鉢叩　其角

千鳥さへ加茂川こえて鉢叩　、

[illegible]
今ゝし年[illegible]
[illegible]の拾ふ[illegible]
年[illegible]
[illegible]
[illegible]
西[illegible]
本の[illegible]
一瓢のいんて春の[illegible]
中ふのそれを[illegible]

其角
嵐雪
希因
其角
蕉村

賀

[illegible]表[illegible]雪[illegible]
[illegible]
雪[illegible]
[illegible]
雪ふ[illegible]
雪の[illegible]
[illegible]
[illegible]
二[illegible]
[illegible]

芭蕉
、
、
、
、
、
素堂
、
沾徳
、

[illegible]人て[illegible]を[illegible]て雪[illegible]を　沾徳

幸の深[illegible]の雪、

[illegible]なり[illegible]の雪、

雪[illegible]て[illegible]の[illegible]山る　其角

なり[illegible]奈の[illegible]て盧今も雪[illegible]、

雪[illegible]も[illegible]の女[illegible]、

渥鈍な[illegible]備る[illegible]の雪、

[illegible]の[illegible]雪の[illegible]、

[illegible]も雪の[illegible]、

[illegible]しい物[illegible]れ、

冬廿四

青[illegible]を雪の[illegible]丸合羽、

[illegible]の[illegible]の雪、

[illegible]を[illegible]雪[illegible]、

[illegible]の朱買[illegible]の紐、

[illegible]冴[illegible]帰る雪の[illegible]、

[illegible]の[illegible]の雪

[illegible]の[illegible]を[illegible]人[illegible]、

雪の[illegible]、

[illegible]の[illegible]の[illegible]、

[illegible]雪[illegible]、

屋葺き雪やし雪うけ屋、
米俵の海苔もけり雪の松、
按生て雪うちそふ掛袋、
もしくれ雪の蓑屋の日ぬ雪、
雪の夜や紙ぬくうかのいろ、
紙ぬぎ門の雪くも食る、
ちくさよ雪ちる松雪の石、
野川の鶏を洗輪ふ雪えこる、
ちよ雪さくていけ雪の門、
風ちてあくちよなくぬふしの雪、

我雪ぬ出ぬくを軽く笠のうえ、
雪年よ雪を投出けるる　嵐雪
門の雪印とそくのそこう、
雪ちとかくさに出つ笠の築波山、
以雪ちよむうひおこれ人もひ雪、
蓑けくぬ雪の光こう邦、
野雪ちを食もくるう雪のうえ、
いさくやの雪ふや あん雪も清うて、
飛治の中人も雪くさくて笠の雪、
邦の雪下雪のる屋ちとうせり、

蛇をせよ本宮もせよゆくとの猶　嵐雪

桑の雪のうつくしや朝の吉さ　麦林

歳書を爲のうつくしや朝の雪　希因

歳の極も雪の拍木やうつくしう

待をあくるうれん雪の撞小舟　其角

我や紙牛よ雪ちく墨木蓮

えだく行ふ雪のうつる　来山

餅のをのよいうちぬ松を雪の影

ふぬの搗よ痛ひり雪の響

いうくもやうをふ雪とうあ

花ともよむ雪をはほうふないうを

雪をて降るや雪のはをあ

雪を汲んて降るふ新の寝うを

見いうを朝ア〳〵ふ雪の夢

深雪よたのうを傘こうせ雪の雪

有うをぬ火鉢や雪の家居紅　蕪村

いうをうん容寸（カタチウツリ）　簑と　笠

炉火や新うくれ家も雪の中

酒家をうし酒よ新の雪を焼

雪の雪鳴ををふうて居るや

雪白し　かぶの氏人ゐてうて　蕪村

綿さけて淀の小橋を雪の人

雪折や雪を浮す樊噲の下　〃

雪折のようの美女あるべし　〃

雪丸け

雪丸けよりのこゑん雪丸け　芭蕉

雪やけ

ゐんこん雪焼男くろかりし　来山

雪吹

雪吹や瀬田よりおこん雪吹松　其角

雪つぶてつかれ雪吹の那　蕪村

霧

武士の宮て茶くいられる　嵐雪

霧晴や　いらるるもやとる旅庵　其角

ゐてゐて木綿よ消る霧の那　〃

武蔵野や富士の霧のこゑふ　〃

霧をもくくもり鶴の那　〃

一ゐゐ矢根のゐゐられる　蕪村

海へゐる山ゐ雲ゐ沼の雲と　其角

新生してゐて綿ゐんを霧　嵐雪

玉霧漂毋う渦をゐられうり　蕪村

ゐゐゐ紙

ゐゐられ桜の茶乃七日市　其角

ゐゐられるも身いゐゐゐ沈の雪　〃

古池や蛙飛こむゐゐられる　蕪村

氷柏

水鳥の絵をかくに氷柏をかく　其角

柏の葉を葉ばらのさうきう

柏をて柏をば柏ばかりの丸山をてう郷　来山

ひとえの麦藁もはらしをれ

寒の氷　其角

氷

田をうえひて苗をうゑ田ぶを氷うゑ

瓜川や武蔵の行の氷うり　沾徳

滝幅や氷の中を居うり書　其角

岩ゝをき捆の蓋閉る氷うる　来山

こいろを氷ゝ紙の名をうる郭

蓋器うり筆の氷を噛ませうる　蕪村

浮寒

山ゝの減るに少減て氷うる郭

氷仙

うえゝて鶏の足干る岩ゝ　沾徳

ゆ仙や月を月ばかり　其角

ゆ仙や絶ていての小島ゝ

ゆ仙うり引るもをうる　麦林

ゆせん

ゆ仙やをうをの家うり　蕪村

ゆ仙や美人うり無をうる

掃切と庚申さむし水仙　希因

ひとゝの水ゝ枯外古葉うれ　蕪村

葱

葱買て枯木の中を降り

、

韮

[illegible]て韮を刈る義の邪　蕪村

[illegible]れや小雪のかくる韮畠

雁

[illegible]さ雁らくぬる家の舟　其角

雁鴨

[illegible]い鼻のうもれぬ[illegible]　麦林

寒苦鳥

[illegible]るい[illegible]て[illegible]苦とり　蕪村

喧鳥

荒一[illegible]食のぬくとり　其角

鰍

鰍雲市[illegible]と鰍[illegible]　蕪村

杜父魚

杜父魚の[illegible]の義[illegible]

煮凍

煮凍や[illegible]の弁のうを孫　其角

生姜味噌

[illegible]の嵐和[illegible]生姜味噌　嵐雪

蕎麦湯

我の[illegible]乃柴打くゆる[illegible]　蕪村

藥喰

[illegible]の[illegible]多を[illegible]て[illegible]くし　来山

麦や[illegible]の[illegible]と[illegible]茶　蕪村

[illegible]茶[illegible]る麻ケ谷

宵宮の程来入や[illegible]茶

茶茶[illegible]の[illegible]茶　杓茶

[illegible]文徒居[illegible]茶

○十二月

早梅　言水

折しも多くいとうて梅の濃い行

ほのぐらい白の花と梅の香　麦林

ふ梅やし法華の軍屋敷　蕪村

寒梅

寒い梅をふまれ雪やし老う肘、

冬椿（鐵骨とも椿の枝をさすに異法）

さまざまそうそう系入ぶ法ふ　言水

臘八

臘八やし八衛の茅も山を出る　麦林

寒垢離

寒垢離やし上の町まで来ぶ行　蕪村

寒念佛

唱えの気持ちやしぶ寒佛　其角

寒念佛　拾をこゆる法ぶる、

海鹽の鹽いつぶる寒佛、

鹽乾ぶなぶ行寒やし寒佛　蕪村

極楽の近道いくの寒佛、

佛會

ぶ寒ぶ小佛呼なぶ寒の星　来山

寒聲

寒ぶ寒ぶやし南大門の多ぶ月　其角

寒ぶ寒ぶやし古ぶ風ぶ法ぶるぶそ　蕪村

寒月

寒月やし門ぶる寺の天ぶし、

寒月やし寒法の羅漢のぶし法、

寒月やし拾乗の中ぶ仏三尊、

寒月やし鉢岩のぶぶぶさぶ、

寒夜　芭蕉

寒作　蕪村

乾鮭　其角

生鮭　言水

鄭師　其角

使　芭蕉

師走　素堂

其角

[illegible]　甚角

[illegible]　嵐雪

[illegible]　来山

[illegible]　蕪村

[illegible]　嵐雪

[illegible]　芭蕉

古暦

煤拂

[illegible]　治德

[illegible]　甚角

[illegible]　来山
[illegible]　麦林
[illegible]
月代や三十日よりうの餅の色　芭蕉
餅の影や雪ふる枝の梅　其角
[illegible]
餅と解やうらうらあたる　希因
[illegible]
[illegible]　嵐雪
[illegible]　言水

餅花

冬　卅八

[illegible]
[illegible]　希因
[illegible]　其角
[illegible]　麦林
[illegible]　芭蕉
[illegible]　来山
[illegible]　麦林
[illegible]　其角
[illegible]

帝盃張

雜喉薬　其角
すゝ終　燕村
年越　嵐雪
節分　其角
晩冬　素堂
年内暮　麦林
掛乞　来山
年の市　芭蕉

年の市行とてうれし羽織哉　其角
年の市かなしき人のあとをとめて　麦林
我殺をたゞの片方や年の市　嵐雪
古反袋の四十文銭もなし　其角
いとゞ的んまりの涙金のうらなり　燕村
うらひらの稼るや雪の小町寺　来山
角をゝぬるとらろゝ紫の波　其角
年の瀬やひら名のむ移の物哀　来山
年の瀬や漕に揖をとる行舟　来山

歳暮
年稼る
年波
年ノ瀬

年の夕　来山
年尾　甚角
年の内　希因
流年　素堂
岡見　甚角
年木樵　言水
嵐雪
蕪村

冬四十

衣配　麦林
年陶　来山
年守　蕪村
年取
年の皺
年忘　言水
甚角
麦林

天運もこうひとせとしえ　蕪村
人や去る去るの別れとしえ　素堂
後の春を去るよりはかなしの年　芭蕉
ぬを人さあつる春の雪、
年暮ぬ笠きてわらじはきながら、
月出て人の影も山ぞ花盛、
埋てよ雪ん雪ん降る年の暮　言水
夜ともぬまを惜るよ又新たひ　沾徳
雪降て笠の小角や年のくれ　其角
小仏堪りてなふん年のくれ、

年の暮

鳩鳥の夕日赤く年の暮、
やりくまて又や鉄砲ぶしの暮、
年中の紙下ろくらけ暮、
新年の先牛洗ふ暮、
千鳥の鳴せ暮や年の暮、
ふるふる雪ふる年の暮、
猿猴の手をかるや年の暮　嵐雪
蕎麦うて屋敷ぶしの暮、
あるくやゆを炭ぶしの暮、
いろまつの松なて年みとしの暮、

行年

行年も戸板をたてゝ籾の俤

嵐雪
其角

年暮五題

王子狐

大三十日

和布刈て夫もまつの狐哉

言水
素堂
来山

大晦日

弱おアて日ア〻毫さ〻大晦日　其角

大晦日毫ゟ〻ゟ〻ゟ〻ゟ〻ゟ〻毫毫

俳諧十家類題集冬之部終